NEXT CONCERTS
〉〉次回東京定期演奏会

第780回東京定期演奏会

2026年 5月22日(金) 19:00開演
5月23日(土) 14:00開演
サントリーホール

プレトーク 白石 美雪氏　金曜日／18:30〜　土曜日／13:20〜

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会

■1回券料金
S ¥9,500　A ¥8,000　B ¥7,000　C 完売　P ¥5,000　Ys（25歳以下）¥2,500
※障害者手帳をお持ちの方は割引きがございますので、サービスセンターにお問い合わせください。

TOKYO

リープライヒの超越した音空間ー死とは哀しみか、美しさか

ハイドン：
交響曲第44番《悲しみ》
ホ短調 Hob.I:44

三善 晃：
谺（こだま）つり星
〈チェロ協奏曲第2番〉

武満徹：群島 S.
ー21人の奏者のための

R.シュトラウス：
交響詩《死と変容》
TrV158, op.24

©堀田 力丸

©Seiichi Saito

チェロ：佐藤晴真

指揮：アレクサンダー・リープライヒ

次回東京定期演奏会指揮者にインタビュー！

アレクサンダー・リープライヒ編　　きき手　後藤 菜穂子

――2年前の定期演奏会で演奏した三善晃の《魁響の譜》に続いて、今回は彼の《谺（こだま）つり星》（チェロ協奏曲第2番）を取り上げます。三善の音楽にはどのような印象をお持ちになりましたか？

フランス的な要素を強く感じました。《魁響の譜》は三善の《海 La mer》（ドビュッシー）といってもよいのではないでしょうか。もちろん、三善独自の様式で書かれていますが、フランス音楽に感じられる洗練さや細部へのこだわりの点で共通していると思います。

今回演奏するチェロ協奏曲は、そうした彼の音に対する美学を持ちつつ、とてもヴィルトゥオーゾ的な曲で、佐藤晴真さんをお迎えすることを楽しみにしています。本作がサントリーホール10周年記念委嘱作品で、初演は堤剛さんが行ったとうかがい、30年後にふたたび同ホールで演奏できることをたいへん光栄に思っています。

――さらに、日本の作品をもう一作、武満徹の《群島S.》を選ばれました。これまでに指揮されたことはありますか？

昨年3月に、私が音楽監督をつとめるバレンシア管弦楽団と演奏しました。彼らにとって初めて弾く作品でしたが、一音弾いただけで、いかに繊細に書かれた音楽であるかを見抜き、とても細やかに演奏してくれました。

個人的には、《群島S.》は武満の最大傑作のひとつだと思っています。まるでブーレーズのように精密でありながら、響きの点ではより秀でています。曲は21人の奏者を舞台上に「群島（archipelago）」のように配置するものですが、私には、それが北海道から本州、四国、九州、沖縄へと南下していく一連の島々のように思われるのです。そして、そこに台湾も含めてもよいかもしれません。* すなわち、これらの「群島」は単なるグループではなくて、関連する島々なわけです。つまり同じ宇宙に属し、同じ文化の中に存在し、音楽の中で互いに関係性を築いている。これは実に人間的ですばらしいことだと感じます。

――これらの2作をハイドンとリヒャルト・シュトラウスで挟むという構成は、昨年のプログラムと同じですね。

ハイドンとリヒャルト・シュトラウスは、ミュンヘンに住む私にとって身近で欠かせない、南ドイツ地域を代表する音楽です。

ハイドンの交響曲第44番《悲しみ》は、ミュンヘン室内管弦楽団の首席指揮者を務めていたころに何度も演奏した大好きな曲です。これはハイドンのもっとも "クレイジー" な曲のひとつで、疾風怒濤的な激しさをもち、きわめて自由な発想で書かれています。短調ですが、悲しい曲というよりも、悲しみを祝福するものだといえます。その点は、シュトラウスの《死と変容》にも共通していて、どちらも暗い曲ではなく、むしろ神聖な崇高さを持っているのです。

《死と変容》は、20代のシュトラウスがワイマールの宮廷楽長を務めていた時期に書かれた作品です。ワイマールは、ゲーテやシラー、フンメル、リストなど多くの芸術家が活躍した小都市で、ミュンヘンという都会から離れたシュトラウスにとって、創作に打ち込める環境だったことでしょう。

また、これはヒューマニスティックな背景を持った曲です。楽譜には詩が付いていますが、シュトラウスはこの詩のテキストに一語一句合わせて作曲したのではありません。たしかに、詩に描かれている死の場面や昇天の場面は曲の中に聴き取れるでしょうけれど、彼はヴァーグナーとはちがって、テキストが音楽を決定づけることは望んでいませんでした。むしろ彼が描いているのは「変容 Verklärung」、すなわち物事が変化していくことだと思います。シュトラウスは生涯最後に書いた名作《メタモルフォーゼン》でも変容を扱っていますし、その意味で《死と変容》は、初期の《メタモルフォーゼン》と言ってもよいのではないでしょうか。

*リープライヒさんは本年1月より台北市交響楽団の首席指揮者を務めている。

TOKYO